

法が失敗するとき：家族、恐怖、そして10月7日の根源

2025年7月9日現在、イスラエル・パレスチナ紛争は、国家の免責と国際社会の麻痺の結果を厳しく物語る証拠として存在しています。この責任の真空状態の中で、絶望的な行動が生まれています。それはイデオロギーだけで駆動されるものではなく、家族を守るための原始的な本能によるものです。イスラエルの広範な行政拘禁の使用は、記録された拷問や児童虐待によって特徴づけられ、国際法に直接違反し続けています。しかし、国際社会はこれを止めるためにほとんど何もしていません。このエッセイは、2023年10月7日の拉致事件—251人がガザに連れ去られた—は無作為な残虐行為ではなく、体系的な不正義の予見可能な結果であったと主張します。それらは、法が保護を提供せず、絶望が武器となる心理的・政治的現実から生じたものです。

これらの超法規的な行動は容認されませんが、その根源を理解するには、全体の文脈を検討する必要があります：抑圧するために設計された法制度、介入する意志のない国際社会、そして大量拘禁と虐待によって引き起こされる普遍的な親の本能です。1997年の映画『エグゼクティブ・ターゲット』で描かれているように、妻を救うためにテロ計画に強制的に参加させられた男性は、愛する人への脅威が従来の道徳を上回ります。制度的正義が失敗すると、この本能は説明であり、警告でもあります。

イスラエルの法違反：集団的懲罰としての拘禁

何十年もの間、イスラエルは行政拘禁の体制を維持し、パレスチナ人を起訴や裁判なしに、しばしば無期限に、秘密の証拠に基づいて投獄することを許可してきました。1967年以来続いているこれらの慣行は、第四ジュネーブ条約（第64-66条）および市民的及び政治的権利に関する国際規約（第9条および第14条）を明確に違反しています。

2024年半ばまでに、9,500人以上のパレスチナ人がイスラエルの拘留下にあり、2023年10月以降、少なくとも53人が拘留中に死亡し、その多くがアムネスティ・インターナショナルによると拷問に関連しています。14歳の子供たちが性的屈辱、殴打、心理的虐待を受けています。これらは孤立した過剰行為ではなく、人口全体に対して拘禁を武器化する体系的な装置の特徴です。

この強制、抑圧、支配の戦略は、1979年の人質奪取防止に関する国際条約で定義される人質奪取に似ています。軍事裁判所での99.7%の有罪率では、法的救済はフィクションです。この文脈では、パレスチナ人の家族は法によって保護されていません—彼らはそれによって迫害されています。法制度そのものが支配のメカニズムとなり、外部の力によって挑戦されるまで国家法が残虐行為を正当化するために使用された歴史的な事例を反映しています。

国際的共謀：保護の失敗

国連機関、人権団体、国際的な監視者からの広範な文書化にもかかわらず、世界は行動を起こしていません。イスラエルの拘禁体制に対して責任を問うための意味のある制裁、国際的訴追、外交的措置は取られていません。2005年の国連世界サミットで確認された保護の責任（R2P）は、国家が人道に対する罪を防ぐことができない場合、国際社会が介入する義務を課しています。しかし、この場合、執行は欠如しています。

2023年から2025年にかけての停戦仲介による捕虜交換—特に135人の被拘禁者の釈放—は、政治的意志が結果を変えることができることを示しています。しかし、これらの瞬間は無関心の規範に対するまれな例外です。2025年の国連総会の討論で再確認されたように、世界はそのR2Pを果たす義務に失敗しています。一方、国際刑事裁判所（ICC）の遅々とした調査は執行可能な行動を生み出していません。パレスチナ人は、懲罰的な占領勢力と目を背ける国際社会の間に閉じ込められています。

この沈黙は虐待を可能にします。それは、ルワンダからボスニアに至るまで、法的規範が明確であったがそれらを執行する意志が欠如していた国際社会の過去の失敗を思い出させます。これらの悲劇と同様に、イスラエルの拘禁システムに与えられた免責は清算を要求します。

保護の本能：無法システムと心理的引き金

法が崩壊すると、本能が支配します。自分の子を守る衝動は、進化によって刻まれた最も強力な人間の本能の一つです。2024年に『Nature Reviews Psychology』に掲載された研究は、親の投資が種を超えた生存戦略と生物学的に結びついていることを示しています。子供への脅威は、特にそれらの脅威が絶えず未解決のままである場合、深い神経学的反応—恐怖、攻撃性、絶望—を引き起こします。

2023年の『Journal of Traumatic Stress』の研究は、集団的トラウマと無力感が反応的攻撃性を増幅することをさらに強調しています。HubPagesの記事「Instinct—Are We Born With a Protective Instinct?」（2024年更新）は、これを「ママベア」の反射になぞらえ、愛する人が危険にさらされると社会的および法的規範を上回る普遍的な現象としています。

この現実、1997年の『エグゼクティブ・ターゲット』で劇的に描かれており、スタントドライバーが妻が人質に取られた後、誘拐計画に強制的に参加させられます。家族への脅威は、彼が通常なら決して考えない行動に駆り立てます。この物語はフィクションですが、多くのパレスチナ人の家族の現実を反映しています。9,500人以上が拘留され、子供を含む—パレスチナのコミュニティは、喪失、虐待、死の絶え間ない恐怖の中で生きています。

そのような環境では、報復し、人質を人質と交換する衝動は、合理的であるだけでなく避けられないものになります。2011年の捕虜交換—1,027人のパレスチナ人に対して1人のイスラエル人捕虜—は、超法規的な圧力が結果をもたらすことを示しました。正義がない中で、絶望は戦略となります。2023年10月7日はこの観点から理解する必要があります：体系的な拘禁、国際的な放棄、そして自分のものを守る圧倒的な本能によって形作られた絶望的な行為です。

選択的憤慨の偽善

引き起こす虐待に立ち向かわずに超法規的対応を非難することは、偽善的であるだけでなく危険です。それは、国家の暴力は合法かつ見えないが、反応的暴力は犯罪的で非難されるという道徳的二重基準を維持します。この不均衡は、国際法自体の正当性を侵食します。

論理は単純です：正義を執行する任務を負った機関が失敗すれば、人々は他の手段を見つけます。『エグゼクティブ・ターゲット』の主人公が、誰も妻を救わないときに違法な行動を選ぶように、家族が標的にされ、救済の道がないとき、抑圧されたコミュニティも行動します。これは正当化ではなく、原因の診断です。

歴史は、真の責任は症状ではなくシステムを対象とすることを教えてくれます。ニュルンベルク裁判は、絶望したドイツ市民を非難することから始まりませんでした。それは免責の構造を解体しました。パレスチナの暴力のサイクルを終わらせるには、国際社会は根源に対処する必要があります：イスラエルとその軍事法的装置による体系的な違反です。

結論：虐待を終わらせるか、絶望を予期する

イスラエルの行政拘禁システムは、法的な見せかけに基づいて構築され、暴力によって維持されており、国際法の重大な違反を表しています。国際社会が自身の人間の権利基準—R2PやICCの命令を通じて—を執行し続ける失敗は、家族を守る本能が政治的武器となる真空を生み出しました。

10月7日は避けられなかったわけではありませんが、予測可能でした。法制度が崩壊すると、最も古い本能が残ります。絶望的な者を非難し、強者を保護するのではなく、世界はこの紛争の中心にある構造的不正義に立ち向かわなければなりません。

イスラエルの拘禁体制を終わらせ、国際的責任を執行し、法への信頼を回復することは、法的必要性だけでなく、将来の絶望を防ぐ唯一の道です。それが起こるまで、免責と反応的暴力のサイクルは、恐怖、トラウマ、そして最も重要なものを守る不変の本能によって駆り立てられて持続します。